哲學研究　第四百四十八號　第三十九卷第二冊

天上地下を對置する他界觀念の成立

棚瀬襄爾

未開民族の死後生活に關する思想は思想構成上二大別される。一は再生信仰や異生への轉生の信仰であり、二は他界觀念である。此の外に復活の觀念や所謂 jump up white-fellow belief[1]（はじめて見た白人を祖先の歸來とした信仰）などが擧げられるが、之は極めて特殊なものであるし、且前者は一の類型に近く、後者は二の類型に究局的には歸屬せしめうるやうであつて、まづ此の二類型を考察すれば未開民族の死後生活に關する思想は窺ひ得ると思はれる。一の類型は假に名づけるならば生命觀に立脚するものであり、二の類型は人格的靈魂觀に伴ひ、人格觀的宗教系列に屬する。この兩者が思想上區別さるべきものであることはタイラーにも認められ、[2]ヴントも他界觀念が神話的なものであるに對して輪廻思想は哲學的思索の產物であると云ふ立場から區別してゐる。[3]なほこの兩者は思想構成を異にすると同時に文化系統を異にして存在してゐる。

さて他界觀念について古來問題とされてゐるのは、他界の在處と、他界の性質である。[4]（ハーバート・スペンサーは後者を來世 another life 前者を他界 another world と呼んでゐる。[5]）他界の在處としては地上の異界、地下の他界日月星辰等の他界、天上の他界、西方の他界、等があげられるが、未開民族の他界は一民族一つであつて、複數他界

觀とりわけ天上地下の對置の如きは未開民族には殆ど知られざるものとされてゐる。又他界の性質については繼續の理論 continuance theory と應報の理論 retribution theory が區別され、未開民族の他界は此の世の連續であつて、應報の他界が宗教史上に出現するのは死者の書、ベーダ、アベスタ、ユダヤではバビロニア捕囚以後であるとされる。(6)

かくて天上地下を對置する他界觀念は一般に文明宗教の所有であり、且現世の道德的行爲の應報が、この分化せる他界に於て行はれるものと見られてゐるのである。

筆者は本論でオセアニアの他界觀念における天上地下對置の民族資料を指摘し、之を精査することにより、倫理的行爲との連關は附加的に發生するもので、天上地下の對置がなされるのは元來歷史的事情、換言すれば民族交錯、文化交錯によつて成立したものであることを證明し度いと思ふ。曾て筆者は「西方淨土起源論」を草し、其の中でハーバート・スペンサー等の民族移動による他界の方位の成立が所謂西方淨土觀には當はまらないことを論じたが、(7) 天上地下を對置する他界觀念の成立についてはスペンサーの民族的移動と征服によるとする說を支持しなければならない。(8) 但しスペンサーはニカラグア等僅かの資料によつて且つ極めて觀念的に論ずるのみであるから、本論に於ては他界觀念の資料だけでなく、弔葬儀禮の資料をも合せ考へて立論して見度いと考へる。

(1) Dawson, J.: Australian Aborigines, 1881, 110, Howitt, A. C.: Native Tribes of S. E. Australia, 1904, 442, Hartland, S.: Primitive Paternity, 1909, I. 234-6
(2) Tylor, E. B.: Primitive Culture, 1871, II. 2-20
(3) Wundt, W.: Elemente der Völkerpsychologie, 2 Aufl. 1913, 408-410
(4) Tylor: op. cit. II. 60-107
(5) Spencer, H.: Principles of Sociology, 5th ed., 1906 I. 183 f.
(6) Tylor: op. cit. 94-100
(7) 拙稿「西方淨土起源論」龍谷大學論集三四五號、三四六號（昭和二十七・八年）

(8) Spencer: op. cit. 208 f.

一

天上地下の對置を最も明瞭に見せる他界觀念の所有者はポリネシア土着人である。

エリス諸島のナヌメア島では死者の靈魂は「若しよければ」天にある明るく美しい水の國へ行くが、「若し悪ければ」泥と暗黑へ送られるとする。然しこゝに善と言ふのは死者の友人が大葬宴を死者の爲に行つたことを意味し、悪とは吝な友人が死者の爲に何も行つてくれなかつたことを意味すると言ふ。[1] トンガ島東方のニウエ島人の他界觀念については二三の報告があるが、トムプソンによれば德ある者は永劫の光の國 Ahona に行き、悪を爲せる者は暗の國 Po に行くと言ふ。德とは親切、貞節、他部族からの竊盜、敵の殺戮であり、悪とは同族からの竊盜、公衆意見やタブーの破侵、卑怯、平和時の殺人である。Po に於て靈魂が何をなすかを推測する程勇敢な者はゐないと言ふ。[2] スミスの資料によるとニウエ島人は死者の靈魂 angaṅga の存續を信じ、善人は Ahohololoa 又は Ahonoa に行き、悪人は Po に行くとする。Po は他のポリネシア人の Po と同じく、夜の暗黑を意味するが、夕陽の方向にあるとしてゐる。又スミスは天國の他の名として Moto-a-Hina（ヒナの島）を擧げ、Ahohololoa とは別の第二の天であるとする。[3] ターナーはニウエ島人の他界として地下界 Maui と天にある Sina の國を擧げてゐる。Sina の國には夜はなく永久に光と花があると言ふ。[4] 資料に若干の出入があり、特にスミスの資料では天に二天があること、Po が西方にあることが指摘せられてゐて興味があるが、Po の比較研究上からは元來地下で、之が太陽との關係又は民族移動の記憶によつて西方とせられたものと思はれる。

マニヒキ島では首長等は死後天國へ行き、電光、雷雨を送るとせられており、一般人は東方にある Pofafa へ行くとせられる。Pofafa は歌と享樂の國であるが食物はないと言ふ。fafa はサモアでは死者の靈魂の集まるところを意

味し、トンガでは haha は fafa の轉訛で、悪臭のあることを意味する。從つて Pofafa は死靈の集る Po 又は匂ひ悪き Po を意味する譯で、[5] 元來地下界の Po であつて、之が何等かの理由によつて東方に表象せられたと見うる。

ソサエティ諸島では死によつて肉體を離れた靈魂は他の精靈に捕へられ夜の國にして神々の住處でもある Po につれて行かれるとする。Po では靈魂は徐々に神々に食はれる。Po は憐れなところである。又天界觀念があつて Rohutu-noanoa と呼ばれる。香りよき Rohutu の意である（Rohutu は Pulotu のタヒチ風の發音であると言ふ。[6]）極めて美しい處で、空氣は健康によく、木々も豐かで香氣が高く、いつも美しい花が咲いてゐる。食物は豐かで樂しみが多い。この天國にはアレオイ結社の者が行く。Po の悲慘か、Rohutu-noanoa の享樂かを決定するのは死者生前の道德的行爲でなく、神の不快に見舞はれる唯一の罪惡は儀禮の等閑、供物の閑却であると言ふ。[7] タヒチでは Rohutu-noanoa はライアテアの高山の上の空中にあるが、人間の目には見えない。それは七層をなしており、「タネの口」（光の入り來る入口の意）と呼ばれる最上天には Taaroa が住み他の諸天の神々を統率するとされる。一般人の靈魂の行く Po には一種の淨罪界があつて、こゝで靈魂の罪や無實が決定せられる。罰として行はれるのは肉を骨から削り取ることである。かくして淨められた靈魂は、Po へ行くが、Po は決して嫌な恐ろしいところではない。Po は死者の領土であつて、親戚知己に會ふことが出來ると言ふ。[8]

ハーヴェイ諸島のマンガイアでは死靈は廣い下界 Avaiki に行くとしてゐる。Avaiki は島の直下にあり、死靈の住處たると共に女神 Miru をはじめ神々の住處でもあり、こゝで結婚し、出産し、喧嘩することこの世の如くであり、むしろあの世の模倣としてこの世が出來たのであるとする。地下界に死靈が下るのは冬至夏至の二回で、夕陽の光跡について下るとする興味ある觀念も報ぜられてゐる。一方戰死した戰士は最初に戰死した戰士が仲間の死靈を夕陽に面するある地點に集めてゐると突然足許に山が出來、青空に飛び上り、冬の乾期の特殊な雲になり、雨期中は戰士の天國 Tiairi 又は Poepoe に上ることができると言ふ。天國は幸福の國で、一說では數階になつた硬石の青い丸

天井を持つと言ふ。天國における戰死者の死靈は不死で Avaiki にある憐れな靈魂を見下す。[9] 同諸島のアイツタキの下界 Miru の國と、Tukaitatua と言ふ善神の保護下にある Iva と呼ばれる「よい土地」も天上地下の對置であらうと思はれる。[10]

マルケサス諸島人は死靈の行くあの世に就て、天と Havaiki と呼ばれる地下界の兩種の觀念を持つてゐる。この中の何れに行くかは死者の犯した行爲の道德的審判によつて決るのでなく、此の世に於ける社會階級によつて決るとされる。卽ち上流階級の死靈は天に行き、一般人の死靈は地下へ行くのである。天は上位の神々、産褥死を遂げた女、戰死した戰士、自殺者及び特に貴族の死靈の住處である。天國は幸福の國であり、食物が豐富であり、そこでは想像に絶する美人の伴侶が得られる。死靈達はヌカヒバ島産の筵よりも美麗な筵に坐し、毎日コ、ナツ油で浴する。そこでは又優れた羽毛や豚の牙、抹香鯨の齒が得られる。一方下界には第二次的諸神と一般の死靈が住む。然しそれは悲慘な國でも煉獄でも、懲罰の國でもなく、反對に、天國も地下界もこの世よりはよいところとされる。天國へ行くにも舟で旅をしなければならぬとされる。[11] ハンディによると天は七層とも四層とも三層とも言ひ、地下は三層で最下層は殊に快適であると言ふ。[12]

ポーモツ諸島の他界觀念についてはフアンガタウ及びタコトから取材したモンティトンによると、靈魂が身體から離れると靈魂は三つの別々の場處を指定せられる。その何れに行くかはこの世に於ける社會的地位と道德的行爲によつて決定せられる。其の第一は Pararangi すなはち天國である。神々の集ふところであり、特に勇敢な戰士、貴族及び地上に於て强力であつた者の靈魂が住む。第二は Kokorupo と言ふ地下界であつて、救ひ神 Tama の言を聞き之を遵守した善良な一般人の靈魂の住處である。其處では患ひも勞働も病氣もなく、各種の食物が豐かで、死靈は遊山をしたり、情欲を滿したり、舞踏をしたりしてゐるのみである。第三の他界は泥沼であつて、不信の爲にタマが救ふことができない、又は救ひたがらない靈魂の落ちるところである。不信は窃盜、淫逸、殺人、食人よりも更に

惡であると考へられてゐる。Pararangi と Kokorupo はそんなに離れておらず靈魂は容易に交通が出來、集會等には一緒に集ると言ふ。[13]

ニュージーランドのマオリ族の他界觀念には數種あるやうである。第一はあの世が天にあると言ふ見方である。クナラキと言ふ處で、ある首長の息子が死んだ時、小さい兩拳にクロ芋を握らせて首長の家の中に埋葬され、其の上に板をおいて家族が寢、屍體が十分腐敗した時に彼等は之を掘出して骨を磨き、之を廊下にかけて、時々司祭が靈魂の昇天を助ける祈禱をあげた。各祈禱が死靈を一段づつ幸福の國へ昇らせると考へられるのである。この昇天は長族で、天は十層に重なつてゐるとされる。[14] 死者の兩親は若し小さい者が天に行つてしまふならば何故クロ芋を持たせるのかと尋ねられた時、彼等は「天に行くのか地下に行くのか判らない。だから用意の爲だ・」と答へたと言ふ。子供であつた爲にこの樣な葬法が取られ、且地下へ行くかも知れぬと懸念されたのかと思はれるが、一般には首長や司祭は神の後裔と考へられ、死に際して彼等の靈魂は天に昇り、天で永劫の生活を營むものとされ、且呪文によつたり、澤雀の羽根を用ひて靈魂の昇天を祭禮したりする。[15] 天は十二天より成るとする說もある。[16] 然しマオリ族には地下界を他界と見る信仰もあり、此の信仰がマオリ族に於ける一般的な信仰である。地下界は Po とも呼ばれ、Reinga とも呼ばれる。ポーは夜又は原始的暗黑を意味し、Reinga は他界そのものを言ふよりも靈魂がこの世に別離を告げ、遙かな國へ出發する飛び場を意味する。靈魂は水中に飛び込んで下界に到着すると言ふ。一說によれば天は昇るに從つて一層每に美しさを增し、地下は降るに從つて暗く恐ろしくなり、靈魂は光と食事とを奪はれて憔悴し、終には存在しなくなると言ふ。又一說によれば死靈は塵となつて此の世に歸り、再び死んで竟に消滅するが、このやうな悲慘な最後を遂げるのは一般人の靈魂のみで、首長や司祭は昇天して永劫の生活を營むと言ふ。然し又他の報告は下界をもつと美しく描いてゐる。下界の生活はこの世と酷似するが、この世よりはよいことが多い。死靈の常食は甘藷で、而も上質であると言ふ。[17][18]

東部ポリネシアで地下界を示す用語として最も廣い分布を示すのは Po である。その世界の支配者と見られてゐるのは女神ミル Miru であるのが普通である。ハワイの下界がミルの國とされるのはこの神名による。Miru は Ao（光）に對置されるものであるが、上界が Akea の國とされるのは主要神を一般に Atua と呼ぶことのハワイ訛である。Io, Iho は上界の至上神であり、ニウエ島で上界が Aholololoa, Ahonoa と呼ばれるのもこの神名によると思はれる。アイツタキの Iva も亦然りであらう。Rangi は天の人格化としての神でもあり、又天そのものをも意味してゐる。Tane なる神名の現はれるのは天の光の人格化であり Tiki がラロトンガ等で出現するが、Tane の生産力の人格化である。天上界の名稱としてニウエ島などに現はれる Hina, Sina は元來は月神を意味する。天上界に創造神 Tangaroa, Taaroa が現はれることもあるが、之は分布もせまく、ポリネシアに取つては後期の文化の波である。(19)

(1) Turner, G.: Samoa, 1884, 292 f.
(2) Thompson, B. H.: Savage Island, 1902, 94, id JRAI xxxi. 139
(3) Smith, P. C.: J. P. S. 197
(4) Turner: op. cit. 306
(5) Williamson, R. W.: Cosmic & Religious Belief of Central Polynesia, II, 1933, 104
(6) Williamson: op. cit. II, 373
(7) Ellis, W.: Polynesian Research, 1. 396 ff.
(8) Williamson: op. cit. 1. 361 f. 368 f.
(9) Gill W.: myths & Songs, 152-164
(10) Gill W.: op. cit. pp. 172-5
(11) Frazer, J. G.: Belief in Immortality, II. 363-9
(12) Handy, E. S. C.: Polynesian Religion, 1923, 75-77
(13) Montiton, A.: Les Paumotous, Les Mission Catholiques, VI, 1874, 355 f. Williamson: op. cit, II. 72 f.
(14) Frazer: op. cit. II. 11-13

(15) id : op. cit. 29
(16) Handy : op. cit. 76
(17) Frazer : op. cit. II 27 .
(18) 地下にも十層あり上の四層は夜の大女神、次の三層は Rohe, 下の三層は Miru が治めるとする報告もある。Handy : op. cit. 76
(19) Handy : op. cit. 313, etc.

二

以上ポリネシア人の他界觀念の中で、天上地下の對置が比較的明瞭な一〇程の事例を紹介した。ポリネシアにも地下界のみを他界と認めてゐる例も、ローリーの報ずるトンガ島人、エリス諸島のヌクフエタウ、ハワイ等に見られ、又天のみを他界としてゐる例にはティコピア、エリス諸島のヌクラエラエ、同じくニウタオ、ヴァイツプの例もあり、移動傳說に伴つての西方其の他の方角に他界が表象せられる場合、地下と西方と習合する場合などもあつて、ポリネシア人の他界觀念そのものを明らかにせんとすれば、更に資料もあげなければならぬが、例へば西方の如きはポリネシアのある地方に於ては raro, lalo, 'a 'o が地下と同時に西方を意味する場合があり、[1] 從つて報告者が西方としてゐても事實は地下であるかも知れないし、又ポリネシアでは父祖出自の地は西方であるとされるが、神話的には原始的暗黑から進化したとの觀念もあつて、地下と西方の混合が行はれ得たので、ポリネシア人の主要な他界は天上と地下であつたと見られる。

ポリネシアに於て天上と地下とが對置をせられる場合、まづ第一に問題とせられねばならぬのは、誰がどの他界へ行くかの問題であると思はれる。

現代人の常識たる天國と地獄との對置に於ては、善人は天國へ、惡人は地獄へと考へられてゐる。換言すれば生前

の道德的行爲が他界への入國の條件となり、他界に於てはこの世の應報が行はれるものとされてゐる。然しポリネシアに於ては死者の運命の最大の決定原因は、外ならぬ死者の生前の社會的地位であり、社會階級なのである。

マニヒキ島では天界に行くのは首長の死靈であり、Po-fafa へ行くのは一般人である。ハーヴェイ諸島のマンガイアでは Tiairi 乃至 Poe Poe と呼ばれる天上界へ行くのは戰士であり、一般人は地下なる Avaiki へ行くとされてゐる。マルケサス諸島でも天上界へ行くのは上流社會の者、産褥死をとげた者、戰死者及び自殺者である。ポーモツ諸島では勇敢なる戰士、强者及び貴族は Pararangi なる極樂に行くし、善良なる一般人は地下なる Kokorupo へ行くとしてゐる。マオリ族でも天上界へ行くのは首長や司祭の死靈である。ソサエティ諸島では Rohutu-noanoa なる上界へ行くのはアレオイ結社のもの、首長及び其の友人達であつて一般人は Po へ行くものとされてゐる。（上記の事例參照）

ハワイの他界觀念に就ては先に擧げなかつたが、ハワイではアケアの國とミルの國を共に地下界とする者と、アケアの國を上界、ミルの國を下界とする者とがあるが、死後前者へ行くのは首長等であり、一般人は後者へ行くとされてゐるのである。[2] 尙この外に天上地下ではないけれども貴族と平民とが死後の運命を異にするとの報告は他にもいくつかある。例へばブラウンのサモア諸島人に關する報告によれば、彼等の他界は何れも Sa-le-fee と呼ばれる地下界とされるが、其の地下界には一種の區劃があり、又地下界へ入る穴は貴族と平民とで別である。貴族の穴から入ると Pulotu へ行き、平民の穴から入ると le-nuu-nonoa へ行くと言ふ。[3] ステアによると平民の穴から入つたところが Sa-le-fee であるとも言ふから、[4] 元來はこゝでも Pulotu の天上界と Sa-le-fee の地下界が對置され、それが貴族と平民に配置せられてゐたものかも知れない。ハンディはサモア島人には八層、九層、十層の天界觀念があり、神々や首長の靈魂の住所であると述べてゐる。[5] 最も極端なのはトンガ島人の場合であつて、マリナーによると貴族の靈魂は死後も存續して Bolotoo に行くとするが、平民の靈魂は死と共に其の存在を終ると信ぜられてゐると言ふ。[6] 但し其の他

界の在處は資料によつて或者は北西にありとし、ある者は東方にありとしてゐる。(7)

他界の名稱の言語系統を同じくしながら在處を異にしたり、或は在處を同じくしながら名稱を異にしたりする點に就ては、尙言語學的研究も進め、文化混合の樣態に就ても考察を進めねばならぬけれども、今こゝの直接の問題とする天上界と地下界への入國の條件はポリネシアに於ては壓倒的に社會階級に結合してゐることが判るのである。首長と貴族、時には司祭が之に加へられてゐることもある。司祭は上流階級に屬するが、時には首長が同時に司祭であることもある。數個の島に於ては天國に入る爲の資格として戰士たることが擧げられてゐる。ラロトンガでは戰士は Avaiki に行きうるが、一般人は下界に行つて神に食はれてしまふと言ふ。ニウエ島でも敵の殺戮は永劫の光の國 Ahona に入る爲の條件となるし、マルケサス諸島でも戰死者は天に行きうる。ポーモツ諸島では勇敢なる戰士や强者は貴族と共に Pararangi に行くとする。フォツナ島人の祝福の國の在處は明確ではないが、戰に於て勇氣を示すもの、國の爲に血を流す者、就中戰場に於て最初に討死した者は祝福の國に行きうるとしてゐる。(8) 若しもポリネシアの社會階級が民族移動に伴ふ征服、被征服の關係によつて成立したものとするならば（之に就ては後でふれる）、征服民族の勇者が其の功大なるものとして死後によりよき世界に入る資格を認められるのは異とするに足りない。就中戰死者にかやうな資格が認められることは更にあり得ることである。敵を倒した者も亦同樣である。

マルケサス諸島などの產褥死者の靈魂が天上界に行くとされる理由は明確には判らない。一般にポリネシアの社會は父權的であるから、オンドン・ナヤワに見られるやうに、假令首長一家の者でも女性は平民と同じ他界に行くと言ふ觀念を生ずることもあるが、(9) 產褥死者のみは特別に取扱はれてゐることが多い。世界一般的に言ふと產褥死者は極めて恐るべき靈鬼となるとされてゐるから、ポリネシアに於ても恐るべきものとして敬されるが爲に天上界に配されたか。將又女性の產褥死は男性の戰死に准ずべきものとせられた爲か。マルケサス諸島から報ぜられる自殺者の靈魂の天上界への配當に就ても憶測をいでることはできないが、之亦非業の死として其の靈魂の力が買はれたものかも知れ

ない。何れにしても、之等は首長や貴族の他界に取つては附隨的なもので、他界決定の根本條件は特定の階級への所屬の中に見出される。

ロヰーの言ふやうに「人類史の全領域に於てポリネシア人程階位の區別に大なる意義を附與したものはない」。[10] ポリネシアの社會構造について本稿で詳述する暇はないが、一般に其の社會は貴族と平民に分たれる。貴族は更に幾段階にも分たれることがあり、長子相續制が之を更に複雜化し、長子は其の地位に留るが、貴族でも下位者の末子はやがて平民になる。卽ち降下的社會移動がある程度存在してゐる。これは貴族の數を制限して其の特權を維持する爲にも必要な措置であつたかと思はれるが、か樣な事情の存在にも拘はらず、貴族と平民とは其の祖先を異にするものとされ、他界にまで相異が認められたのである。

だが死者個人の、世襲的でない、生前の行爲が死者の行くべき他界を決定するとの觀念がポリネシアにも全くないとは言へないやうである。ターナーはエリス諸島のナスーメアで、死者の靈魂は若し善ならば天上界へ、若し惡ならば泥と暗黑の地へ行くと聞いた時、てつきりこゝに倫理が死者の運命を決すると言ふ觀念があると考へた。[11] 然し善惡とは何かと言ふ彼の質問に對して善とは其の友が死者の爲に大葬宴を張つたことを意味し、惡とは彼の吝な友人が何も行はなかつたことを意味することを敎へられたことを記してゐる。それは未開民族に屢々見られる死者の運命は生者の供養によつて決せられるとする觀念を反映してゐるにすぎない。ハワイでもプケアの國に入る爲には宗敎的信條に忠實なることが要求せられるし、[12] エリスの資料によればソサエティ諸島ではRohutu-noanoaとPoの何れに行くかを決定するものは倫理によらず、唯一つの罪は儀禮の閑却、供物の等閑にあるとされてゐる。祭司の行ふ祈禱が死靈を地下界からRohutu-noanoaへ移す力を持つとされてゐるのである。[13] アイツタキではIvaへ行くものはココナツと甘藷を手向けた者である。[14] 之等は善と言ふ名で呼ばれようとも、其の性質が神又は死靈に對する宗敎的行爲であつて、人倫的行爲とは呼び難い。

ポリネシア人の他界信仰に關係のある倫理的行爲の樣相を明らかにする爲に、神に對して行はれる人の行爲と、人に對して行はれる人の行爲とを區別して見るならば、神に對する人の行爲が他界に入る爲の條件とされてゐることが多いことが判る。人に對する人の行爲が他界への條件とされるのはフォツナ島に於ける首長への從順、戰鬪における勇敢、國の爲に血を流すこと、戰場における初戰死が擧げられよう。(16) これらは人の人に對する行爲ではあるが、つよい封鎖的社會性を示し、結局は上記の階級の範疇に包攝せらるべき性質のものである。唯トムソンの擧げたニウエ島の例における親切、貞節、他族からの窃盜、敵の殺害を德とし、惡とは同族からの窃盜、公衆の意見やタブーの破棄、平和時の殺人であるとする觀念の中に、つよい封鎖性にも拘はらず、若干一般的な個人の對人間的行爲が他界の決定に反映してゐることを見うるのみである。

唯特記すべき觀念としてモンティトンの報ずるポーモツ諸島の例がある。卽ちこゝでは不信者には一般人の地下界とも別の泥沼の世界が約束せられてゐる。不信は窃盜、淫逸、殺人よりも惡とするのであつて、高い宗教性を示してゐる。それは又倫理による他界の分化をも示してゐるかも知れない。けれどもこれは散發的に現はれたものと見る外なく、宗教民族學的評價の對象となすことがむつかしい。

要するにポリネシアの天上地下他界觀に於て、其の入國の條件として最も重要視されるものは社會階級であり、下つて對神的行爲が見られ、遙かに下つて對人的倫理的行爲がわづかに萠芽的に出現してゐることを見うるのである。言ふまでもなくこのことには重要な意義がある。卽ち他界の複數制の出現、特に天上地下の對置は、倫理觀念の發展に伴ふ內的發展又は內的分化の結果出現したものでないことを示す。天上地下の對置觀はすでに成立してゐて、道德的觀念は僅かに之に伴つて出現しはじめたことをポリネシアの他界觀念資料は雄辯に物語つてゐるのである。

それならば天上地下の對置觀は如何にして成立したものであるのか。階級によつて他界が異つてゐることは天上の他界觀念を持つ民族と、地下の他界觀念を持つ民族がこゝに交錯し、力の關係によつて社會的に階級を成立せしめる

と同時に天上地下對置觀を成立せしめたことを暗示してゐると思ふが、然しこのことを論證せんが爲には、尙いくつか觀察すべき點を殘してゐる。

(1) Williamson: op. cit. I. 294-296
(2) Frazer: op. cit. II. 427-429
(3) Brown, B.: Melanesians & Polynesians, 1910, 218-223
(4) Stair, J. B.: J. P. S. IV. 123 f.
(5) Handy: op. cit. 77. Krämer, A.: Samoa Inseln, 1902, 22
(6) Mariner, W.: The Tonga Islands, II. 122
(7) Williamson: op. cit. II. 346-348
(8) Williamson: op. cit. II. 95 f.
(9) Parkinson, S.: Int. Arch. f. E. XI. 198, 204
(10) Lowie, R. H.: Primitive Religion, 1925, 76
(11) Turner: op. cit. 292 f.
(12) Frazer: op. cit. II. 427-429
(13) Ellis: op. cit. I. 397 f.
(14) Williamson: op. cit. I. 368 f.
(15) id: op. cit. II. 95 f.

III

ポリネシアの天上地下對置の他界觀念の兩分されることを證明せんが爲に試みられねばならぬのは他界の性質乃至狀態の考察である。

天上界の性質は一見して判るやうに終始一貫理想的な世界として描かれてゐる。ソサエティ諸島のRohutu-noanoa

はエリスによれば匂ひのよい世界で、大木や灌木が多く、美麗な花が咲く。ムラヌーによれば光と喜びの國であつて苦病死がなく、花も果實も豊かで、歌と踊りと宴が行はれ、女達は常に若いと言ふ。マルケサス諸島の天上界も幸福の國であり、食物が豊かで美人があると言ふ。恐らくポリネシアの天上界程の美麗な他界が描かれてゐるのは他の未開民族にはないであらう。

けれども問題としなければならぬのは地下界の性質である。

まづ地下界 Po が如何なるものであるかを考察しよう。マオリ族ではポーなる地下界は暗の國とされ、ニウエ島の地下界ポーも暗の國であり、ソサエティ諸島でもポーは神の住處であり、夜の國であり、死者はそこで肉を削られ神に食はれるとされる。ポーは暗黒又は夜を意味する言葉としてポリネシアでは普通に用ひられ、この言葉の連想から地下界が陰鬱であるとされる場合を生じた。が、然しポーは世界觀や神話と關係を有する概念であつて、トレヂャーによれば Po は cosmic darkness の意であり、ウィリアムソンによれば darkness and chaos を意味してゐて、(1) 必ずしも悪い世界を意味するのではない。そこにはかなり發達した宗教思想が見られる。然しそれでも、地下界がポーと呼ばれる場合に於てもポーが悪い世界とされてゐない場合は少くない。先にあげたタイチの例では、ポーに行く靈魂が骨から肉を削りおとされるが、ポーは決して嫌なところではないとされてゐる。骨から肉を削りおとされるのをタイチでは刑罰の如く考へてゐるらしいけれども、之は元來淨めの象徴的表現で刑罰ではない。ソサエティ諸島のポーは憐れなところと表現せられてゐるが、然し一方神々の住處であつて、元來それ程悪いところとされてゐたとは思へない。ポーに於て徐々に神々に食はれると言へば、之も一種の刑罰の如く聞えるけれども、神に食はれると言ふのは神に融合することの象徴的表現なのである。マオリ族にも一説では地下界ポーはこの世と酷似するが、この世よりはよい世界とする觀念もある。

ポーと呼ばれる時には一方に於ては高い宗教思想を示してゐるが、他方に於ては陰鬱の地と言ふ連想を生じ、特

に天上界との對置に於てマオリ族の場合の如く地下は下るにつれて暗く恐しくなるとされるに至つた。然し元來は必ずしも悪い世界でなかつたことが窺はれたが、ポーと言ふ名で呼ばれない場合には一般に明るく把握せられてゐる。

ポリネシアにも地下界のみを他界としてゐる民族があるが、その様な場合之を陰鬱の地とは考へてゐない。例へばロツマ島人の他界 Limari は島の西方ラサ沖の海下にあるとされてゐるが、こゝには全ての死靈が行き、コヽナツ、豚をはじめ、人間の望むものが何でもあるとされてゐる。(2) エリス諸島のヌクフェタウ島人の地下界 Tia には家や木もあり、家族や氏族の別もあると言ふから少くともこの世の連續があの世に認められてゐると見ねばならない。(3) ブカブカ島に於ても地下界では死靈は銅鑼を打つて踊りを爲してゐると言ふから、之も亦陰鬱の世界とは見られてゐない。(4)

天上界と對置される地下界でもポーと呼ばれない場合にはそれ程悪いところとの觀念はなく、むしろ理想化さへされてゐる。ハーヴェイ諸島のマンガイアでは天上の Tiairi 又は Poe Poe に對して地下界 Avaiki が信ぜられてゐるが、Avaiki は神々の住處であり、この世はあの世を模して作られたとしており、マルケサス諸島人の地下界も第二次諸神の住處であり、この世よりはよりよいところとせられてゐる。ポーモツ諸島人の天上界 Paratangi に對する一般人の行く Kororupo なる地下界には患もなく、病氣もなく、又勞働の必要もなく、食物は豐かで、死靈は遊山をなし、情欲を充しながら生活してゐるとするのであるから、地下界の理想化が見られる譯である。

勿論天上界と對置されることによつて、地下界は悪しきところとする觀念が次第に成長し、マオリ族の場合には地下界は下るにつれて暗く、恐しくなり、靈魂はつひには絶滅するとの觀念を生じたり、アイツタキでは、ミルの下界では百足虫を食はされるとの觀念を生じ、次第に天上地下の性質が分化しながら、統合されてゐるが、元來地下界は悪しきところでなく、一般人がそこに行つて住むそれ自身統一のある連續の他界であり、ある程度理想化された世界であつた痕跡はまだ讀み取ることができる。マオリ族やポーモツ諸島で、ポーの性質が善悪様々に述べられてゐるのも

ポーの觀念の變化の過程を示すものかも知れない。

メラネシアの南部、バンクス、ニューヘブリデス諸島には地下界のみを他界とする民族が分布してゐる。例へばバンクス諸島人の地下の他界 Panoi にはこの世と同じ村があり、家があり、非實質的ではあるが、美しいところで、そこで永遠の生活が營まれると言ふ。(5) ニューヘブリデス諸島のペンテコストの地下界 Banoi にも家や木や村があるが、勞働の必要はないから畑はないとされる。(6) この様な地下界觀念の實例はまだ他に多數示すことができるが、この地下界觀念とポリネシアの地下界觀念はもと同一の文化に屬するものであつたと言ふ推定は恐らく不可能ではあるまい。

(1) Treager, E.: The Maori Polynesian Comparative Dictionary, 1891, 342, Williamson: op. cit. I. 288
(2) Gardiner: JRAI. XXVII. 469
(3) Turner: op. cit. 286
(4) Gill: Myths & Songs from the South Pacific, 1876, 171
(5) Codrington, R. H.: The Melanesians, 1891, 273-277
(6) id: op. cit. 287 f.

四

此の推定を單なる假定のものに終らせない爲に、一つの實證を試み度い。それは葬法と他界觀念との關係を考察することである。然し勿論火葬と天上界、埋葬と地下界の如き、葬法と他界觀念との內的心理學的關係を窺はんとするのではない。それはあり得る關係かも知れないが、必ずしも文化の事實ではない。むしろこゝで問題とするのは特定の他界觀念に伴ふ事實としての特定の葬法である。

さてメラネシアの南部の地下界の他界觀念のみを持つ民族の葬法はきまつて埋葬であり、然も屍體の體位は屈位又は坐位である。一定期間がすぎると發掘洗骨をなして頭蓋を取り、之を祭る。つまり內的頭蓋崇拜を行ふのである。

此の形式は南部メラネシアに一般に行はれてゐるところである。樹上葬または臺上葬を行ふオーストラリア中部北部の民族には再生信仰が一般的である。樹上葬または臺上葬に於ても、複葬が行はれるが、取られる遺骨は頭蓋ではなく、長骨である。このことを實證的に示すことは本稿では省略せざるを得ないが、このやうな顯著な特色を持つ地下の他界觀念に伴ふ弔葬法を、ポリネシアの天上地下の對置に於ける地下界觀念も、若し同種のものであるならば、持つてゐるのでなければならない。

ポリネシアに於ても埋葬は廣く出現してゐる。卽ちオントン・ヂヤワの下級民、エリス諸島、フォツナ島、サモア諸島、トンガ諸島、ニウエ島、ハワイ諸島、ソサエティ諸島、ラロトンガ島、ニュージーランド島等に見られるのである。けれども埋葬は極めて簡單な葬法であるから、何れの文化にも出現し易く、ポリネシアに埋葬があるからと言つて、こゝにメラネシアと同一系統の文化があるとは言へないかも知れない。そこで我々は更に屍體の體位を問はなければならない。幸にしてポリネシアにも屈位の埋葬の報告が數例は存在するのである。ハワイ諸島人の埋葬、ソサエティ諸島人の埋葬、マンガイアの埋葬、マオリ族の埋葬の場合が之である。(1) 此の體位は意識的に取らしめられるのであつて、特に縛ると言ふ報告のなされてゐることもある。屈位の事例はポリネシアにはあまり多くはなく、伸展位に移行した場合が多かつたらしいが、このやうな屈位の資料の存在は南部メラネシアとの文化の同一を推定せしめるに足るであらう。同族頭蓋保存が屈位の埋葬に伴つて行はれると言ふ統一の示されてゐる例はポリネシアにはあまりない。然しソサエティ諸島には頭蓋を家の中に吊したり、廟におさめたりする事實があり、この習俗は急速におとろへたらしいが、曾ての其の存在を推定してよいと思はれる。

ポリネシア社會の最大の特色は先にも述べたやうに階級の著しい發達であるが、この階級の別は又葬法とも關係を持つてゐる。それは上位階級の葬儀の盛大、下位階級の簡素と言ふが如き量的性質のものでなく、異質的葬法の取られることが稀でないのである。其の例を我々はハワイ諸島、ソサエティ諸島、ポーモツ諸島、マルケサス諸島等に見

ることができる。ハワイでは平民に對しては坐位の埋葬が行はれるが、首長及び司祭階級に對しては伸展位埋葬であり、ソサエティ諸島では貧者に對しては坐位埋葬が行はれ、首長家族に對しては木乃伊葬が行はれてゐる。ポーモツ諸島では屍體を瀑して乾燥せしめ、之を洞穴に納めるのは地位の高い人に對して行はれる。マルケサス諸島では木乃伊葬が極めて優位であつて、首長は勿論廣く一般人にも行はれ、埋葬は下層社會の子なき女性に對して行はれると言ふが、階級により葬法が分れてゐた時代の名殘を示すものではあるまいか。マオリ族でも首長は乾燥葬で、一般人は坐位埋葬であることが多いが、特に南部では埋葬が多いと言ふ。(12) この他首長階級に對する木乃伊葬や石室の構築などの事例は數多いのであるし、禁制を伴はなければ、葬法の相互採用はあり得たとせねばならぬが、以上の事例によつて略、下層民と貴族が元々葬法を異にしてゐたらうことを想定することができる。然してはじめ坐位埋葬があり、後に乾燥葬が入つたらうことは民族移動の方向から言つて、マオリの南部に坐位埋葬が多く、北部に混合が多い事例が示してゐると思ふ。

ポリネシアの天上界と地下界が階級に結合すること、天上界と地下界の對置に於て、地下界を惡しとする觀念が成立しはじめたが、地下界も元來惡しきところではないこと、メラネシア南部には地下界觀念のみを持つ民族が分布し、それが特定の葬法を持つこと、この葬法はポリネシア下級民の葬法であつたらしい痕跡を持つことから、我々はポリネシアに於ける天上地下の對置觀念が元來夫々一つの他界觀念を持つ民族の混合によつて成立し、それが漸次混融の過程を示し、かすかに道德的行爲による他界決定觀を發生せしめつゝあることを論じ得たかと考へる。

ハンディは天上界も地下界も、所謂 Tangaroa を主神とするタンガロア儀禮に對して、所謂 Indo-Polynesian 儀禮に共に屬するとして論じてゐるが、(13) それが更に上記の二つの系統の混合の所産と見うるのではなからうか。ポリネシアの天上界が幾層かの階層を持つことはすでに事例に指摘したところで、ポリネシア天上界の特色であり、まれにはマオリ族の如く地下界にも階層があるとされてゐることもあつて、之亦天上地下の統一を示しつゝあるが、地下界

には階層の報ぜられない場合も多く、元來は別個のものであつたらうと思はれる。この天の階層については本稿には其の系統を辿らないが、極めて印度的であり、更には牧畜民族的のものであることだけは記しておいても大過はないであらう。

ポリネシアに於ける天上地下の對置觀念の成立の過程は同時にポリネシアにおける階級成立の過程でもあるであらう。未開社會の階級成立には各種の因子が働いてゐるが、[4] ポリネシアに關しては古くからグンプロウィツ、ウオード等に說かれてゐる民族混合による階級成立論があてはまるやうに思はれる。[5]

(1) Frazer: op. cit. II. 417-427, Ellis: op. cit. I. 399 f., Mourenhout I. 553 f., Gill: Myths and Songs 170 f., Frazer. II 20 f.

(2) Ellis: I. 399 f., Emory, K. P.: Taumotuan Religious Structures and Ceremonies, 1947, 96 f., Frazer: op. cit. II. 356

(3) Handy: op. cit. 312-330

(4) Landtman, G.: Origin of the Inequality of the Social Class, 1938, Jacobs, M. & Stern, B. J.: General Anthropology, 1947 ch. VI. VIII, etc.

(5) Gumplowicz, L.: Der Rassenkampf, 1883, 205, id: Grundriss der Soziologie, 1885, 124, Ward. L.: Pure Sociology, 1903, 203 f.

五

同じく天上と地下を對置する他界觀念であるが、ポリネシアのそれとはかなり異質的な對置が東南オーストラリアに見られる。東南オーストラリアの諸族は自然依存の經濟段階にある極めて未開な民族であるだけに、この天上地下對置觀の存在が取りわけ注意をひく。

宗教民族學上比較的よく知られてゐる事例はドーソンの報じた西南ビクトリア諸族のそれである。これらの諸族で

は四、五歳以下の幼兒は靈魂を持たぬとされるし、又來世もないとされるが、其の他の者の死靈は三日間墓の附近をさ迷うた末に雲の上なる美しい國へ行き、惡人の靈魂は一年間地上にさ迷ひ、然る後地下の Unmekulleen へ行くとせられるのである。[1] この資料はフレイザーにも引用せられて我々に親しまれて來てゐるのであるが、[2] ドーソンは右の報告を與へてから「上記の觀念のあるものは白人の渡來と共に發生したもので、シドニーから一部族、一部族と傳播して行つたものであらう」とした。この樣な意見もあつて、宗教民族學上土着信仰として重要視されず、むしろ看過されて來たのであるが、更に調査を進めて見ると、同種の觀念を、具體的に部族を明瞭にして報告してゐる資料もあり、然も白人渡來前からの信仰であることを指摘してゐるものも見出される。

マニングの資料によると南部ヴィラヂュリ族では死靈は至上神 Boyma の前に連れて行かれ、可滅性を拂ひ落されて不滅性を獲得すると子神 Grogoragally によつて審判され、善と決められると天 Ballima に導かれ、惡と判ぜられると燒かれるが、其の行先は Uruma と言ふ穴乃至地下であると言ふ。天に於ける死靈の存在は靈的性質のものであるが、絶えず踊り、歡呼してゐると言ふ。[3] 然もこの場合注意すべきことはマニングがこの天上地下對置の他界觀念が土着のものであるか否かを特に注意して觀察してゐることである。マニングがこの信仰は白人から敎へられたものではないかと疑つた時に、土人は逆に白人は何故に天を Ballima、地獄を Uruma、神を Boyma 又は Grogoragally と名づけぬかを疑問としたと言ふ。

ホキットが其の著「クルナイとカミラロイ」に採錄したシュテーリンの記錄にはボトヂョバルク族の南部々族たるグルディチュ・マラ族にも生前の善惡によつて行先のきまる天上地下の對置觀念が報ぜられてゐる。卽ち善人の行く、人間を支配する男神の御許なる光の國 Mūmble Mirring と惡人の行く暗黑の國 Burrit Barrat の對置が報告されており、然もこの觀念は白人渡來前からのものであることが附言してある。[4] カミラロイ族に就てもホキットは單に天上界をあげてゐるに過ぎないが、[5] リドレイによれば善人は死ぬと天 Guragulla に行つて至上神 Baiame の

側に侍し、悪人は行けないとして、個人道德的な善悪の標準をも掲げてゐる。[6] 悪人の行先が明記されないが、ボトヂョバルク族の場合と同様の考へ方があるのではあるまいか。更に興味のあるのはワケルブラ族のそれであつて、右きゝの者の昇天、左きゝの者の地下下降が信ぜられてゐる。彼等は白人をはじめて見た時左きゝの者の歸來と考へたと言ふ。[7] 右きゝ左きゝと言ふのは社會慣習と關係があるに相異ないが、白人以前からの信仰であることを示すと共に、周圍の民族のそれと比較すれば、右きゝ、左きゝが天上地下に結合したのでなく、其の逆であることが判る。

天上地下のこの興味ある對置が、若し白人宣教師の傳へたものでないとするならば、それは如何にして成立したものであらうか。この場合まづ我々は東南オーストラリアの他界信仰としての天界信仰の廣い分布の事實を想起しなければならない。ムレイ河下流のナリンデェリ族の天 Wai-irre-warra,[8] ウィンバイオ族の天 Nuruf をはじめ、[9] ヴオトヂョバルク、グルディチュ・マラ族をも含めたクリン諸族（原始至上神 Bunjil を崇拜する爲にブンヂル諸族とも呼ばれる）の天、至上神 Daramulun を崇拜するシュミットの所謂ユイン・クリ諸族の天界、其の奥地のウィラヂュリ・カミラロイ・ユーアライ諸族等至上神 Baiame を信ずる民族の天界、[10] 南部オーストラリア北東部エア湖東側のデイエリ族の天 Piriwilpa、ワィルピ族の Kindjira 等多數の例を擧げうる。[11] 之等の天界の特色は屑のない單一なる天であり、原始至上神を持つてゐることである。

天上地下の對置の場合の天上も、この廣く東南オーストラリアに信ぜられてゐる天上と同一のものであることは、常に至上神と密接に結合した天上界であることによつても知られる。

それでは天上と對置せられる地下界は何れの系統をひくものであらうか。我々はオーストラリア本土には地下界のみを他界とする唯一つの民族も知らない。然し東南部メラネシアには先にも述べたやうに、地下界のみを他界とする多數の民族のあることを知つてゐる。從つて我々はこの東南部メラネシアの文化的影響の存在を疑つて見てよいと考へる。

至上神を信ずる原文化の民族の葬法は單純埋葬であり、伸展位の體位を取らせることが一般であり、東南オーストラリアの諸族に於ても左樣な事例を數多く示すことができる。[12] 然し先に述べたやうに南部メラネシアの地下界信仰には坐位が伴つてゐる。この影響はつよく東南オーストラリアに及んでゐるのである。西南ビクトリア諸族では坐位にして縛るし、[13] 南部ヴィラヂュリ族ではかたく皮につゝむ、[14] グルディチュ・マラには十分の資料がないが、ヴオトヂョバルクでも坐位にして縛ると報ぜられるから、グルディチュ・マラ族も同一と思はれる。カミラロイ族も坐位にして縛ると報ぜられてゐる。[15] つまり地下界信仰に伴ふ儀禮の一半はこゝにも見られる樣である。オーストラリアで洗骨と頭蓋保存の事例が乏しいのは遺憾で、唯クイーンランドのマリボロー三十哩以内の地域で複葬に伴ふ發掘が行はれると言ふが、[16] 頭蓋の保存がなされるか否か明らかでないし、其の他界觀念の報告もない。唯我々は坐位のかなりの分布から見て、地下他界文化の影響があつたと言ふ推定に若干の確かさを與へることを以て一まづ滿足しなければならない。

かく考へればオーストラリア土人における天上地下の對置も文化混合の所産であることになる。唯ポリネシアの天上地下の對置と著しく異なる點は、こゝに於ては階級も發生せず、倫理的把握のつよいことである。前者はこれ等の民族の低い經濟段階に關係を持つであらうし、地下界文化が微弱であつた事にもよるのであらう。この弱さは農耕がつひに入らなかつた事によつても知られる。後者は、原文化の民族がシュミットの說く如く、道德性の高い爲であるか、或は混合の古い爲にこのやうな把握がつよくなされるに至つたか何れかであらう。何れにしてもこの樣な原始的な民族に、天上地下の對置觀がすでに見られ、然も倫理的把握がなされたことは極めて興味のあることである。にも拘はらずそれは混合の所產であることに變りはない。他界の性質として天上が光の國であり、祝福せられた天上界であるに對して、地下界も亦よりよき國であることが、混合を證する爲には更に望ましいけれども、之は恐らくは地下界文化の微弱と、倫理的把握の爲に、惡しき、暗國の地なる點のみ强調せられるに至つたと思はれる。又其の天界は

ポリネシアの如き階層のある天界とは別のものであるとする混合の所産たる事を傍証するものであろう。

(1) Dawson, J.: Australian Aborigines, 1881, 51
(2) Frazer: op. cit. I. 142
(3) Manning, J.: Notes on the Aborigines of New Holland, R. S. N. S-W. XVI. 1882, 161-4, Schmidt, W.: Der Ursprung der Gottesidee, III. 1931, 895-7
(4) Howitt, A. C.: Kamilaroi & Kurnai, 1880, 274-8
(5) Howitt, A. C.: Native Tribes of S. E. Australia, 1905, 439
(6) Ridley, W.: Kamilaroi, 1875, 140 f.
(7) Howitt: Native Tribes, 471-474
(8) Howitt: op. cit. 434
(9) Howitt: op. cit. 436 f.
(10) Schmidt: op. cit. III. 719, id: Sprachfamilien u. Sprachenkreise der Erde, 1926, 158-160, Parker, K. L.: The Euahlayi Tribe 1905, 90 f. 87 f. 124 f.
(11) Elkin, A. P.: Belief and Practices connected with Death in N.-E. & W-S. Australia, Oceania, VII 1936-7, 279, Howitt: op. cit. 434 etc.
(12) Howitt: op. cit, 451, 465, Elkin: op. cit 278 f. etc.
(13) Dawson: op. cit. 63-67
(14) Howitt: op. cit. 465 f.
(15) Howitt: op. cit. 452 f. 466 f.
(16) Howitt: op. cit. 470 f.

天上地下を對說する他界觀念にはこの外マライシアに若干の事例がある。即ちミンダナオのグラマン族の刑罰に値しない者の天、刑罰に値する者の地下界 Kilot[1]、同じくバゴボ族の複雜觀的靈魂觀念に結合した一人の人間の一部が天

Palakalángit、一部が地下 Karonaronawan に行くとする觀念、[2] ボルネオのランド・ダイヤの善人の天、惡人の地下、[3] スマトラのバタク族やミナンカバウ族に於ける極めて倫理的に把握された天上地下の對置、[4] 對置とは言へないが天上地下が特殊の結合を示すアンダマン島人の場合などが之である。[5]

以上の中アンダマン島人の場合はネグリト諸族の他界觀念の比較研究から、元來天界信仰を有したところへ、地下界觀念が後期に結合したらうことが推察されるが、ランド・ダイヤ諸族やスマトラの諸族の觀念は高等宗教の觀念の受容ではないかと疑はれるものである。ミンダナオのクラマン、バゴボ兩族の他界觀念にも高等宗教の影響の疑ひがあるが、他界觀念の分布上から言へば、ダヴァオ周邊には地下界のみを他界とする民族や、天上界のみを他界とする民族があるから、或は交錯による天上地下對置觀念がこゝで成立したのであるかも知れない。この點は今後の研究に俟たなければならぬが、天上地下對置觀念の成立問題でマライシアの如き文化の混淆の著しい地域の民族を持出すことは不適當のやうな氣がする。

ポリネシアやオーストラリアで文化混合の結果天上地下對置觀念が成立したことを論じて來たが、言ふまでもなく、之等の地域で成立した觀念が高等宗教に採用せられて、高等宗教の體系の中に入り、つよく倫理的に着色せられたと言ふのではない。同じやうな過程によつて同じやうな天上地下の對置觀念は、高等宗教の發生地に近い地域でも成立してゐたのであらう。それが採用せられただらうと推定してゐるにすぎないのである。特に階層のある天の信仰を持つ民族と、地下界の觀念を持つ民族の接觸した可能性は南アジアや西アジアにも十分あり得たのである。[6] (了)

(1) Cole, F. C.: Wild Tribes of Davao District, Mindanao, 1913, 153-7

(2) Cole: op. cit. 105, Schadenberg, A.: Die Bewohner von Süd-Mindanao u. der Insel Samal, Z. f. E. XVII 1885, 31 は天を十層とする。

(3) Kruijt, A. C.: Het Animisme in den Indischen Archipel, 1906, 381

(4) Warneck, J.: Die Religion der Batak, 1909, 82 f. Kruijt: op. cit 371-5, Loeb, E. M.: Sumatra, 1935, 123 ff.

(5) Man, E. H.: On the Aboriginal Inhabitants of the Andaman Islands, 1883, 161-3. Radcliffe-Brown, A. R.: The Andaman Islanders, 1922, 136 f.

(6) 石田英一郎「民族學の根本問題」昭二五、一四三—一六二、等。

（筆者　龍谷大學文學部〔宗教社會學〕教授）

前號目次

世界文化の生成……ジュリアン・H・スチュワード
——文化運動に見られる通則性——
幸福と人間の本質（承前）……岸畑　豐
——パンタムの幸福の概念について(II)——
デカルト自然學の意義……湯川佳一郎

新着外國雜誌所載論文一覽
彙　報

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

The Rise of the Idea of Contraposition between Heaven and the Nether World

By Jôji Tanase

The idea of contraposition between heaven and the nether world is in the higher religions generally interpreted in ethical terms: these two spheres together forming a world of retribution. Many people even insist that the idea itself has been established upon the foundation of ethics. But the religious feeling is deeper than the moral judgement. As is well known to the student of primitive religion, the other world of primitive people is one and uniform for all the dead of a tribe, where they are believed to continue their lives as on earth. This conception of another world, notwithstanding its naïvety, fulfils their religious needs.

In this essay, the present writer treats the rise of the idea such a contraposition using some ethnographical materials, especially those of the Polynesians and of some of S. E. Australians. He thus concludes that this contraposition has arisen by a mixture or contact of two different cultures, one of which had the idea of a celestial world and the other that of a subterranian world. This opinion has already been suggested by such a scholar as H. Spencer, but the present writer tries to confirm it by examining into the quality of the other worlds, social stratifications, vagueness of ethical qualifications, and the ways of the disposal of corpses among them. This mixture, he thinks, could also

happen in South and S. W. Asia, and the thus originated idea of contraposition was then introduced to the higher religions, which have given it ethical modifications.

*'Happiness and Human Nature'—On Bentham's Idea of Happiness II

By Yutaka Kishihata

This paper discusses the problem reserved in my preceding study on 'Happiness and an Existence of Man', that is, the problem of necessity contained in Bentham's idea of happiness. For it is one of the three points the clarification of which is required for proving the adequacy of the idea; and this has been my fundamental question from the beginning of my preceding study. But prior to the consideration of the problem we have to begin what nature of man is presupposed by Bentham. According to Bentham, the real nature of man as an individual is an interested and passionate natural being characterized by self-regard, and to such beings the fundamental social relation is their mutual dependence mediated by the social mechanism of division of labour and exchange. In this respect man must simultaneously be called a social being.

Thus human nature has both active and passive aspects: it is at the same time interested and passionate, and this is the kind of man presupposed by Bentham in his philosophy. Because of this nature man cannot be sufficient to himself, if he seeks his own satisfaction he must do so in his relations to some external objects. As such a man is a natural and social being, so those objects also are natural and social; and as these are independent of him, it is not always assured to him to gain the objects necessary and satisfactory to him. This circumstance necessarily makes man interested and passionate, and it seems to be a general experience for a man to feel anxiety and distress in many cases of his life. In view of this fact we may say that man must pursue